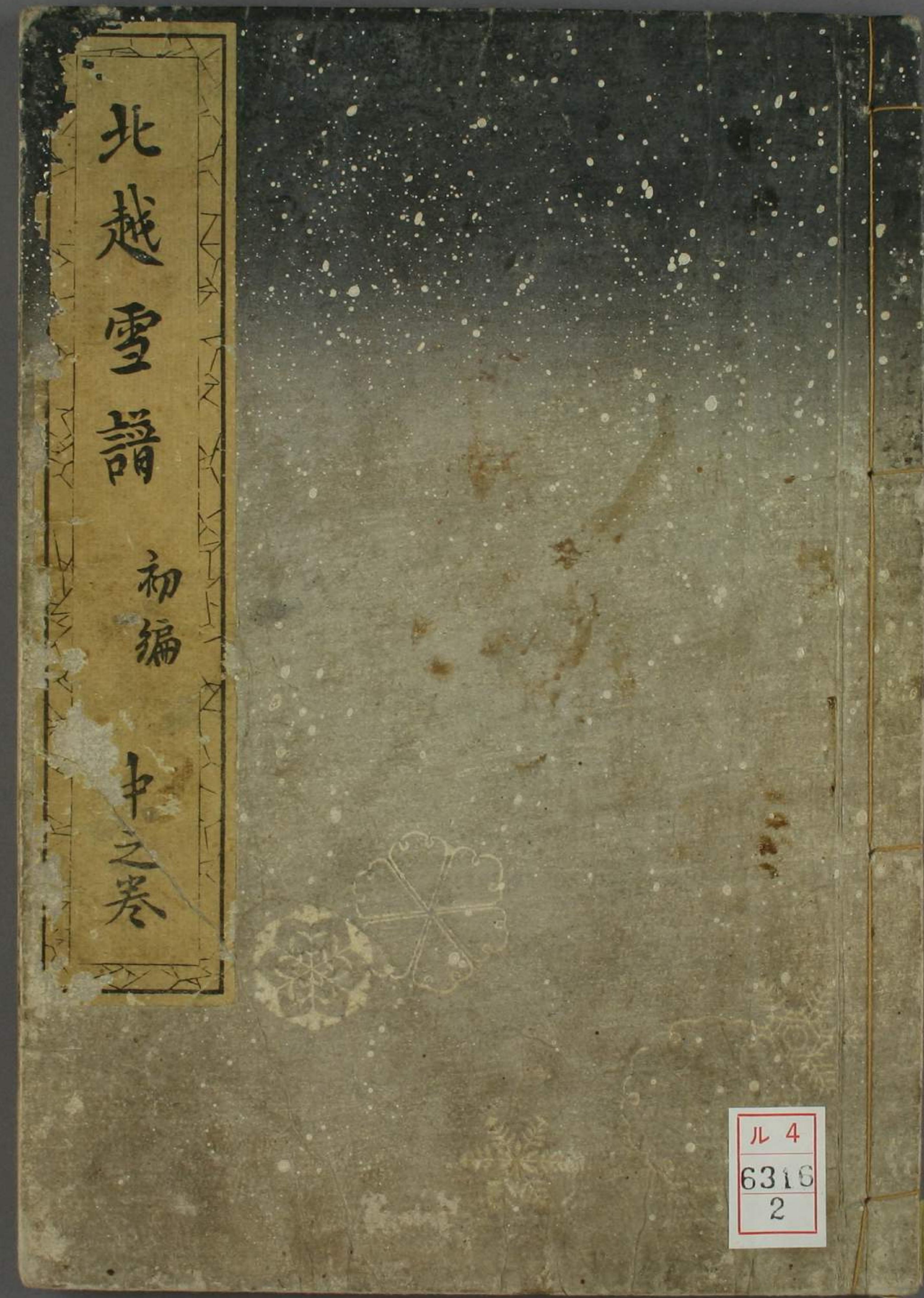
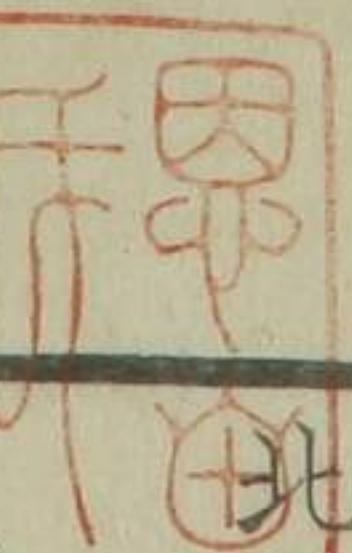


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN Tama





目録



北越雪譜初編卷之中

雪頬人不災モ・次第下ホトク 寺の雪頬

玉山翁^フが雪の圖

越後縮

縮の種類

縷綸

織婦の發狂

御機屋の靈威

りのら

菱山の奇事

狐火

雁の代見立

天の網

鴉の總立

渤海川ぎの歩り

通計二十四條

北越雪譜初編卷之十

越後塙澤

鈴木牧之 編撰

江戸

京山人面樹 刪定

○雪頬人ふ災モ

吾住魚沼郡の内にて雪頬の為ふ非命の死をうづる事其村の人の多くを
てふ記もあらずども人の不祥るきび人名を詳ふせば○てふ何村とのふ取ふ家
内の上下十人あまりの農人あり主人ハ五十歳をくわ妻ハ四十ふくら世息ハ二
十あまり娘ハ十八と十五とじゆとも孝子の聞ありけり一年二月の下トウ主
人ハ朝より用あり取出行へ其日も已ふ申の頃うど飯りまくびまく聞を
とるべき用ふるあくびうけとば家内不審ふたりひ恃家僕をつまて其家ふり
父が事をたゞ称へふててまくびとりふかくべとおんじこさんうど家僕と
えうりて尋求へくど更不音問をまくぞ日もすや暮さんとまくば寧々家ふ

りあらうのうへ母ふ語りけどばく心得ぬるよと心あらうの處でかこへ入を走
らせて尋まさせけふおもて在家さへおもとび其夜四更の頃ふいとども主人ハ破
らば此事近隣ふ聞え人々集り種くふ評議して居るをり一老夫来り
てりあらうあ下の見えぬるゆき我心あらうのうあるやゑあらセヤさんとく來
きりとくもんからわすれときて主人の妻大ふよろこび子どもりもともぐふ
言語をそろそろまぐれをのぞき仔細をとづけられ老夫りよやうをきぐ今朝
西山の嶺半ふきからんとせ一時てのあ下ふ行逢何方ととづけられ稻倉村
行え行過ひぬ我ハ宿(敏)足ゆて遙不行過する頃例の雪鶴の音をきてこ
きくびきの山さんと嶺を元事ふ通りへきようごひづけあらのあ下へあらとを
元難ふ行過ひや一方一きよふ逢ひまへぎりへと安ホドつ宿へてゐ今ふ飯
トテモ案ふようひて顔見あらせ望き一ごもをとく老夫ハこまをえそそくふ

立つてゐぬ集居する若人へどもことをききてまづさうの處ふいりてたゞくとん
煙でそよごと立騒ぎけむびひとりの老人がりよりまづまもじり遠くなづ
ゆふ行者もいまだ今やもとの人とかうあすの飯りなましんも
をうりぐすて雪頬ふうすまゆうやう不覺入ゆあざるをかの差奴ぢりゆぎ
ことをいひく親子のもの心を苦うりとりふ親子ハこまふ励まき心慰頤宥を
いぢて入ふもむことをみて皆打まつて炉辺ふ座列て酒酌うてや時うつり
て遠く走る者ども立つてふ行方ハ猶未だりル〇かくて夜も明けまば
村の者どもいまく聞やどり人此家ふ群り来り此上六とて手ふ木鋤
を持家内の人も後ふあきらめかの老夫がりひつまきの處ふ至りけりさて
雪頬を見るふきのとみあわぬまくのさざきの下をとぞとづねんよもぐも
雪の土手をとせりとやこふ死うりともうざきの下をとぞとづねんよもぐも
うけまじりあせんと人々停まつてふかの老人よしく所爲こそあまとえ若

き者どもをつゝ近き村ふいりて雑をかりあつり雪頬の上ふをうち餅をあつて
 かひの處(あもませけるふ一羽の雑羽)きして時あらねふ為晨けまゝ餘のえとくもて
 ふあつまりて声をあわせけりて、水中の死骸をもとむる術あるを雪ふ用ひへば應
 度のオホーとのちくまでも人りひあり老人衆ふむうひあすへうすば此下ふ在
 ハレしき掘きやうにて大勢一度立たりて雪頬を碎きゆどて掘けやどふ大う
 宛をすて六七尺もやり入る。因ふアリタのさくふす。猶ちくもをそてぢり
 けふ真白うる雪のうふ血を染する雪ふりあてもやとて猶り入りて小片
 腕ちぎみて首あき死骸をやりひて、やて腕ハいをすとも首へしをぎてへいふと
 廣く穴ふあするをあつもちやうりとあてやうく首もじぞう雪中ふあり
 やゑ面生るダービーときのぜんよりこふあつて妻子らしきをふるより妻ハ夫ゲ
 首を抱へ子どもハ死骸ふとりまどり声をあげて哭けり入もとてあいとまをうそ袖
 をぬくさめへうすりけりかくてまあくまねば妻ハ着て羽織ふ夫の首をつまそ
 うまきて磨断とする。

○寺の雪頬

きよひ不散て山ふもくまくじ形状峯をタマス處ハ時とてえきうすあり文化
 木ノ久思川村天昌寺の住職執中和尚ハ牧之が伯父仲冬のをゑ此人居間の二階
 ゆく書案ふよりて物を書いてをくまうて窓の底ふ下りる垂氷の五六尺きが明りふ
 まはりて机のやう暗きゆゑ家の擔ふりて家僕グ雪をかくとそうちをきする木鋤を



とくにかのつらを手をもんとて一打うちけり此ひきみやありけん
本堂ふ積くる雪の序屋根石とてまうまう土蔵のやううふ清水がりの池あり
ふ和尚たゞまふ押落きと池に入りまをきをきどこの勢ひふ身ハ手鞠のどく池をも
ももてえて掘揚す雪ふ半身を埋めまをあときげびるてゑふ庫裏の雪をやり
ゆるももづら馳きてアリ持る木鋤もく和尚を掘りてけまば和尚大ふ笑ひ身うち
をアヌクふ脚も痕うけも耳ふ掛る目鏡えつぐまく不思議の命をまもりゆひれ
此時七十余の老僧よきさぎ前より何村の人の不幸ふ比々万死ふ一生をえりて
天幸てんこうといひつゝ也餘も八十余まで元病小一へ文政のをゑふ遷化せまき平日余ふ
あら示してりまくへ我雪頬ふ塙よみとて筆を抹りて居ゐりへ尊き佛經うり
ゆゑたゞやハと一字毎ふ念佛おんぶて書居ゐりあらふ雪頬ふ死まぐろーを不思議
小命助のちなりへ一字念佛の功德ごくめてやわりけんさとび人ハ常ふ神佛を信心へ
悪事災難あくじを免めんゆるをいのづシ神佛を信む心の中より恶心ハいざなり

悪心の无なき災難さいなんをのりて第一ことをへらまき今も猶耳ふ残のこり人智を尽つくて
のちをくゞざる大難だいなんふあふハ因果のあらもむく處ところ人ひとふそくうありて
人家の雪頬ゆきほふま家を潰つぶせー車くるま人の死するをどあまま見聞みきみどもさのく
とあるとく

○玉山翁ぎょくさんおきが雪の圖づ

きたのとー玉山翁ぎょくさんおきが梓行しゆぎやうせよとー軍物語ぐんものぐの画本の中ふ越後の雪中ふた
うひとふ圖づあり文ふみ深雪ふかゆきとありてあらも十二月の下しもふゑがたる軍ぐん兵へい
とゆう舉止きよしうをえふ雪ハ浅あさく見み牛馬うまいを用ひぞりんや軍馬ぐんまいをもあらを馬上の戦たたかひ
雪ゆきあまに國の人の画作ゑがくふ雪の実地じじをもくさべららに越後雪中の真景まんけいハ甚ひん一いった
ぐりあらーうらう画ゑがくふ虚うつもすすきままのさまああれもあときときもありふた
ぐひまま玉山の玉ふ建たてあらんも惜惜けままがもて書通しよつうの交かりふまませく牧まええが描かき
筆ふも雪の真景まんけい種たねく寫うつー猶常じょうじょうふままる真景まんけいもざざと春の半はんままー三国みくに

嶺ふちう紀法師嶺のすとふ在る温泉ふ旅りそあすの雪を見つふか高に
峯トテもろいするをまことひ五七間やどる四角或ハ三角ある雪の長さハ二三十
間もあるとあらが谷ふとてありする上ふうや幾つともく太小まきりするをど
雪国ふうせよする日あそべの奇觀ことばゆへ尽トテこまつの真景をも甚
みうつしとすを添て贈りふ玉山翁返書ふ北越の雪我れ上ふうりから
がおとく目をあとうひこまつの圖をうや多くあら文を添まを私筆にて
例の繪本とぞりし其書雪の霏とするごとく諸國ふ降さんす我筆下ふ
在りといふを書翰今猶牧之書笈ふをもあわう此書うべしと黄うる泉
ふ玉山を沈くへ惜づ

○越後縮ちくまと俗ふくふ

縮ハ越後の名産ふとて普く世の知る處をもど他国人ハ越後一国の產物と
あらへめどさあらば我住魚沼郡一郡ふがまする產物へ他所ふ出るもあらず

僅やうそ其品魚沼ゆべりぐりとも縮と喝のうへ近来のゆあてむりへ
此國ふても布とのまうり布ハ紵を鐵かる物の總名るをべうべー今も我あ
よりゆく老女じめなど今日ハ布を市ふりてあけふどくわいひと古言こゑのこゝり東
鑑かみを舉るふ建久三壬子の年勅使ちくし飯落めんらくの時鎌倉殿かまくらどのより餞別けんべつのふをりて條
小越布千端ちくばんとあり猶古うきにものふも石いはびきどまのこゝ索そを復かのりのゆハ室
町殿まちどのの營中えいちゆうのゆびりを記録せしを伊勢家の書かハ越後布わとゆゆの主
と見えよりさまへむりとす縮ハ此國の名産なさんふりへゆあまうけー愚案ぐあんふむ
くかけて汗あせを凌あぐ為ため小綱こつなせ織おりるをもんま小綱布こつなふといふをもまてち
とのみじひつん歎うらうかくて年歴ねんれきふやどふ猶工うきふりて地ぢを美くせんとて今のが
ちくへ名のまふ残のこりへうん哉が稚わりへ時ときふいひへくべくとくか今の物
の模様もやうを織おりうど錦にしきをむき機作きさくふとくへ劣だらうむうあつうき模

様をもひり縞も飛白も甚上手ふうて種々の奇巧をひき機織婦人
うちの伶俐たりする故ぞ／＼

○縮の種類

魚沼郡の内ゆく縮をひき事一樣うへ村ふうりて出も品ふうもありて
自らむ／＼より其品ふのを熟練して他の品ふ移らざるを其所その品を
産だ事左のとし

▲白縮ハ堀の内町在の村く組とらん内又浦佐組小出嶋組の村く

▲模様るの或ハ羅白ひるる藍錆とひく塩澤組の村く

▲藍綬ハ六日町組の村く ▲紅桔梗縞のるべ小千谷組の村く

▲淺黄纈のるべ十日町組の村く又緝の年慶縞ハ高柳郷みかぎまつ右

りびと魚沼一郡の村く此餘ちを出も所二三ヶ村あまと車らふせばまび
あび／＼舍てあるまば縮ハ右村里の婦女らが雪中ふ蓑り居る間の手業く

おりそく末年賣ざきちをあと一の十月より糸をうみたてて次の年二月
うぶふ晒一をひき白縮ハうちやする所ハかくやまたすうきゞよ人ハ文あるものや
やかくもども手練ハよくあるものと村くの婦女とちがちとふ丹精を尽
毛すきく小冊ゆく冬一ヶ月其あくまくを下ふ記せり

○紵

縮ふ用ふる紵ハ奥羽會津出羽最上の産を用ふ白縮ハひくとく會津を用ふ
うんづく影紵といひの極品とまこと米澤の撰紵と称もとも上品之越後の
紵商人の國ふひて紵をひとめて國ふ賣る紵を此国中もとひふも
古言之麻を古言ふとひひへ縑麻のるべ麻も紵も字美ハからく布ふ
織ぎ料の糸をひき紵を芋ふ作ふ俗也と字書ふとえす

○紵績

余一年江戸ふ旅宿せ一頃或人ひすやう縮ふ用ふる紵を績ゆそぞの處の婦

人誇ひあらせと一家ふあつまうりとの家ふく用ふる縫を續え此人へたゞひふそ
家をめぐらて縫と聞へりうふとりひきひうき人ぞかす空言をばりひあへけん
さううきう魚沼一郡も廣きやく右をうふちる处もありそんとありともど
下品のちどく小用ふる縫のすうきん下品の縫のすうは姑舍て論ぜば中品以上ふ用
あを縫ゆへうむ所の座をまぢらき体を正へくよ呼吸ふつみて手を動せ
て為作をうそ定座ふ居へ假ふ居て其為作をうそばいのびく心鎮をへく
糸ふ太細ひそき用ふなうがく常並の人の縛を續ゆ唾液を用ふまどと
ちうの縫續ゆ茶碗やうの物ふ水をうそひとこをうそひ事毎ふ鹽ひ座を
清めててまきをうそひあり

○ 縷縫

糸ふ作ふゆも座を定め体を囲むるす縫ふかうど縷縫との道具と手術
その次第の順その名ふ呼物許多種もあり繁細の事を詳ふせんハシテ

けまく言ふぞもくうまをうむよりおりをりままでの手作もく雪中ふ在
上品ふ用ふる處の毛ようも綿き糸を経兆舒疾へあううすり雪中ふ竈り居
天然の湿氣を得ざまへ爲一難一湿氣を失ふ糸折るすありをとくとく
力によく断るすあり是故ふ上品の糸をあつみ所へ強き火氣を近体を時り
より織ふあ後て二月の半ふりう暖氣を得て雪中の湿氣薄き時ハ大う鉢
の物ふ雪を盛て機の前ふ置きの湿氣をかりて織るすもあつこまのすふ付
て熟思ふ縫を織ゆ蚕の絲や陰熱を好布を織ゆ麻の糸や陰冷を好む
まえ縫ハ寒ふ用ひ温ううめ布ハ暑ふ用て冷ううめも是ハ天然不阴不陽の
氣運ふ屬むる所ううんう件の如く雪中ふ糸とく雪中ふ織り雪水ふ洒き
雪上ふ晒ふ雪あつて縮あつさまへ越後縮ハ雪と人と氣力相半して名産の
名あり魚沼郡の雪ハ縮の親とくべつ蓋一薄雪の地ふ布の名産あるよ
ハ糸の作りふるすとく越後縮ふ比べて知る者一

○織婦

凡織物を專業とする所ゆゑに織人を抱へまきて織机を利とて縮ちぢみふもの多く
別ふ无き一國の名産うきども鐵婦てつめを抱へまきてくる家々いえありしるんと
タゞバ縮ちぢみを一端えん小うこままでふ人の手を勞なぐらひゆうがて尽つくてまてま
ふ賃錢ちんせんを當て算量さんりょうすあくば雪中ゆきゆうふ箒居ふきよ婦女ふじよ等とう手を空すきくせざるのを
の活業けきぎょう縮ちぢみの糸四千縷よしちよを一升よしとと上うこのちぢ三さん経糸えいじ二千升よしより二十三升よしゆ
至いたる但ただし一箇か五ごハ二十じゅう通とおをあく一升よしの糸ハ八十縷よしちよ布幅ふはく四方よしよ小緯糸こひもとを
ふ隨つづくあわせ併あわせさまで地ぢをうそばうそばよつこと糸いとハ猶多よだらんらんさまで僅よしハ一尺いっしあまりを織おりる
も九百二十度ど手てを動うごかうごを以もつて一端えんを二丈七尺よしととて二万四千四百八十四
度ど手てをもつてうそばうそば端と端とをうそばうそば是は其凡まんをいふののをちぢ三さん丈じやうを定じてて
績うきをドむもとと織おりかうかう一いっ兩りょうととあげて端と端とをまでの苦心勞鑿くしんろうせんかかひひをううる
ちのの三さんあらぎあらぎぞ織物てつものハモも然ぜんうんうん目前まくふ我わら視しととううままひ

二ふたかか縮ちぢみを僅よしの價かを自在じざい不着用ふしょ俗ぞくふりの安やすいのと縮ちぢみをむる處ところのをひく
娶よをえくくふも縮ちぢみの伎わざを第一はじとと容儀ようぎハ次つぎととのあ氣あきふ親ちかするするの娘むすめ
幼よより此こ伎わざを手て習ならむを第一はじとと十二三じゅうさん歳さいより太布おほふをかくかくうるうるももかよよそ十
五六より二十四五歳さいまでの女氣力盛きりよくせいり頃ころ小あくあくぎまま上品じょうひんの縮ちぢみハ機工きこうを好す
せば老お不臨ふりんでハ綺画きが小光澤こみつやととて品しな質しつぐぐててるる貴重きちようの尊用そんようハ其品しな能熟のうじゆくくる上手じょうしをえくくび何方なんかの誰だと指さふふをう
ゑ極品きわみの逃の物ものハ其品しな能熟のうじゆくくる上手じょうしをえくくび何方なんかの誰だと指さふふをう
ゑやゑそのかかひふひふととて各かく伎わざを励はげむむかかる辛苦しんがハ僅よしの價かの
為ためふ他人ほかのひとふもる辛苦しんが唐とうの秦しん鞞玉ひよ村女むらめの詩しふ最恨さいこんむむ年としく金線きんせんを壓あすす
て他人ほかのひとの爲ためふ嫁よめの衣裳いじょうを作つくるととりひくひくハ宜ようう哉哉

○織婦の疾狂

ひひある村の娘むすめががて上うのちちをあくくらまま一いかか大だい不ふよよううてて金きん父お父おを論るせばばててとと小手際いぢまををせて名なををとととと續つづくくより人の



十

元子並目表二之四

京水筆

雪詩者之并

御機の靈風織女狂の圖

手をかゝる丹精の日數を歷てアリハ小織かうへるをまくやより母持きて
してきて娘ハ才子見ゆく物をあけたをもうちまえひに不まぐひふへて
ゑやどる煤りの畳あるをこそ母まゆやせんうやとく縮を頬ふあて
哭倒しけりてより狂とありまぐの浪言をのちて家内を狂ひて
をアリ兩親娘が丹精する心の内をあひひすて哭ひうだけり見る人もある
て玉袖をぬりつけとぞ友人をふりのぎたりせり

○御機屋

貴重尊用の縮をもゆ家の辺りふつり一雪をもその心て掘みて住居
の内をもゆつけ烟の火は明りもよき一間をトシ清らあつてき遊を
あたきべ四方お注連をひきこみて中央小機を建る是を御機屋と唱へ
て神の在りごとく衆尊ひ織人の外他人を入らず織女ハ別火を食へ御機
ふか了時ハ衣服をあらす塩垢離をとり盥漱しこづく身を清む日毎

ふかくのごとく紅潮をりむや勿論之他の娘らなど今日ハ誰と御機屋
を拜ふキアリテ感をすまく宜うき哉うきもの物も守りて敬い信
まきば靈ある空へて人のままで草鞋どふ衆人の信せりふより
てのちくハ草鞋天王とて祭り一華五難組ふねえアサヒニ神く志
を教ハ靈威ある冥くの天道人の知を以てそりあふくらびて小町村の娘
例の御子とやふありて心を澄めしをあて居てふ傍の窓をひと
くと音うひのあり心ふきとひがへあそぶ立つてひきうふをて
心を通す男くをり人目の闇もあくまく心うとくかをとやをりて

○御機屋の靈威

神ハ敬ふよりて感をすまく宜うき哉うきもの物も守りて敬い信
まきば靈ある空へて人のままで草鞋どふ衆人の信せりふより
てのちくハ草鞋天王とて祭り一華五難組ふねえアサヒニ神く志
を教ハ靈威ある冥くの天道人の知を以てそりあふくらびて小町村の娘
例の御子とやふありて心を澄めしをあて居てふ傍の窓をひと
くと音うひのあり心ふきとひがへあそぶ立つてひきうふをて
心を通す男くをり人目の闇もあくまく心うとくかをとやをりて

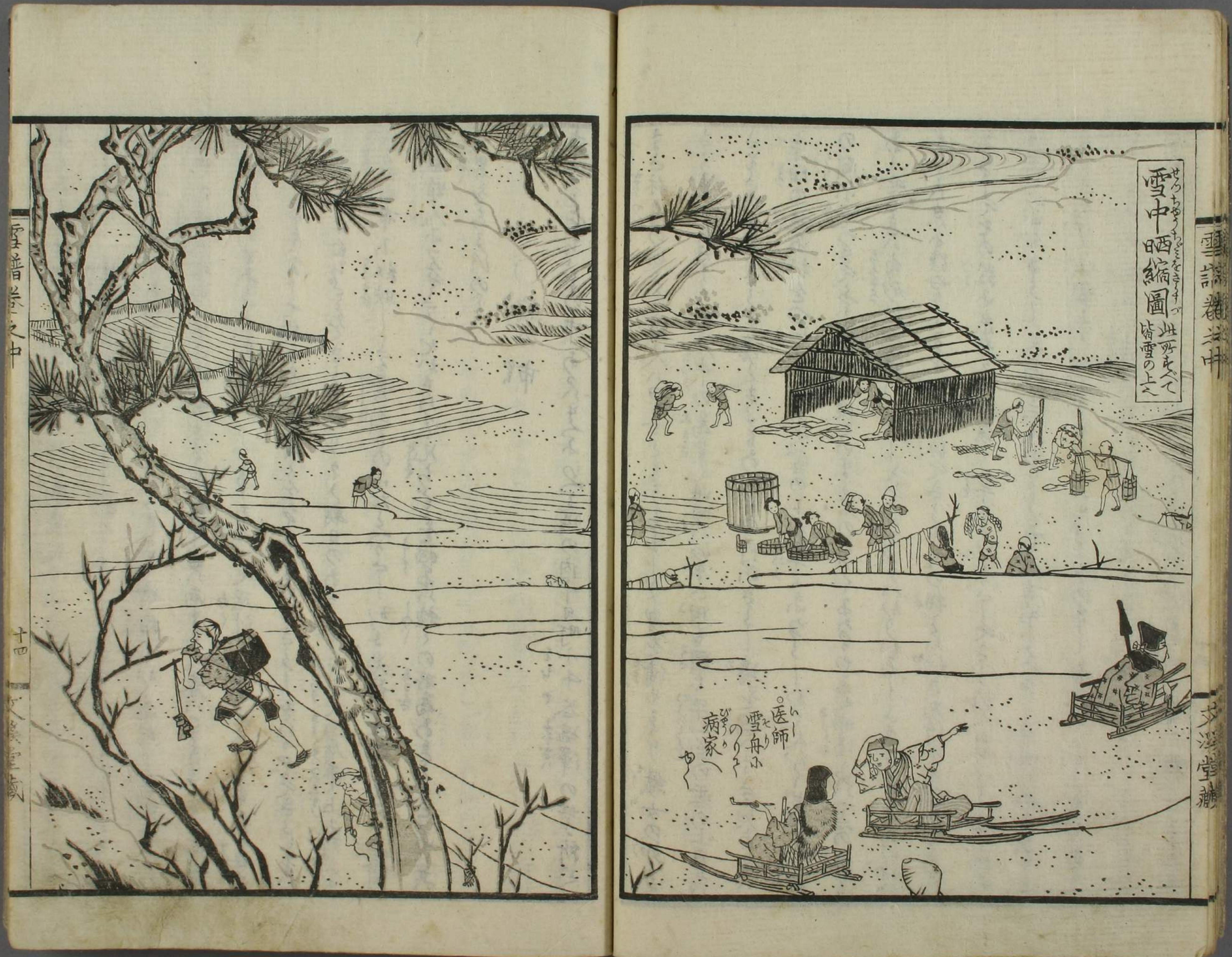
家の後嗣ひたり窓のゆとふ立てる男を將て木小屋に入ぬべし娘の母飯り
來り、ちどりやふ娘のをくぬをくくしごりもまうふとの名をよびけとがふ
木小屋ふきうつけて遠鬱に男ハ逃入り娘ハ心顛倒して身を穢すも打立
ちどりやふうけひりとのま御機ふよりて織んとあけふ候急仰向ふ倒と
落血を吐て絶入り母此状態を見て大おおどろむちようて助け起
まび御をよよりひぐさゑあひうりと氣息あるのみ死りふる
モト父ハ同村のうあぐ家ふ在をよびク医をまねきて藥をと
アシガチのあくもく兩親ふきくわくよりをよせよ
ふ在てうきどき一ぐまつて手を束て死を俟のまちうふひとりの男來りま
耻らふきく人の後ふ座り欲言とててひが頭を低て涙をかとうけり人
ことをえど同村の某ゲ次男へけり此男やうて膝をまくら娘の母ふ對ひ声を
ひともううすやう今いきみをうつまやさん我ハ娘御と二世の約束をまく

のことをやど人みをえりむを誇ひにすがん身のうりかひ
こ多ふをとどまば逃まうとむともうごくかくは思ふ
識する身をともきて畏きがん機ふかうゆひて御罰うんこすと我う
る罪なまび入へちうども余处罚ふアんともうそろへ命をうけ
うごふもるぐうとありかうももうごの命ふ代りて神小御罰を説りん
さうあむ此まくもまめご死ぬべ我う命をもまくらへふをよみ人
ことより証人うまとといひつ赤裸ふうりて髪をよきだ井のりとふをまう奇
あくまふ水を浴雪の上ふ躰居くうふせん唱つてゆけり時も寒氣肌
を貫くをうあうもとが凍も死まうきありさゑくもやはまく人もとて
をとと知り實ふもととえりもとく水を浴くゆのうナリ神明の男
實心を憐み人のひのりをも納受くくけんうの娘の覺へうことく
あう母をよびけまば衆奇異のがいひをうきももの側ふあつまうてゆ

とらの娘のうさぎをつれてゐるが、その母はうさぎのよしのひ
りと、巴もともと御機屋よりして、覚え一ヶのうちがあつた母、あまりの
うきさまふかの男ふもあわせんとせふりつら立まくけんとえびうさぎかへ娘
四五日へおまつりが、やうて常並の身ふきりすり歳も十七うきへが、おて蟹をと
ひをうくるそろくううきが、かのちのび男、實じふ愛て早速媒の搞をこころ
姻礼もめでて、とのひよ程うく男子をもうけたり、其家今猶榮の神の
御罰が夫婦の縁となり、も奇偶とのうべから我、幼うりの時の事、
筆のつて、御機屋の靈廟あるを記すと、おもひうごもあつて、

○
縮ちぢみ
を
瞬さき
也

まご休息の處ともて晒人ハ男女どもうちモリ身を清めり織女^{アガ}の如く走
きまく正月より二月中の為業此頃ハレモ田も圃も平一面の雪の上^{アシ}
とをの上をまく塲とももあつ月の内ふ^{アシ}塲を踏へる處半^木も
手頃の板み柄をつけて物みて雪の上を平うふ^{アシ}一かくかせぎ^{アシ}で夜
の間ふ凍つまでもある處のまゝ岩のごとくあつやゑと晒場^{アシ}一^{アシ}の塵も
あざぎ^{アシ}白砂^{アシ}の塩濱のごとく^{アシ}を白ぢ^{アシ}がりもろ^{アシ}とすをまく餘の
ちぢみ^{アシ}ふほア^{アシ}を拂ふ^{アシ}りてまもとの拂^{アシ}と細^{アシ}き丸竹を三四尺^{アシ}とのり
ふう^{アシ}てその弦^{アシ}ふをうけ揚^{アシ}草ふう^{アシ}け^{アシ}てまくは向ぢ^{アシ}へ平地の
雪の上^{アシ}ま^{アシ}又高さ三尺ある^{アシ}長さハ布やどふ^{アシ}横幅ハ勝手^{アシ}も
せ土キのやうふ雪^{アシ}まつ^{アシ}その上ふち^{アシ}をのぞ^{アシ}うづ^{アシ}きももあ
うせせせせ^{アシ}と^{アシ}狗^{アシ}と踏^{アシ}越^{アシ}てちぢみ^{アシ}をけが^{アシ}せまくふ拂^{アシ}をうづ^{アシ}きしもも
えもその場所の便利ふあよぐ^{アシ}も一定^{アシ}だま^{アシ}を晒^{アシ}や^{アシ}縮^{アシ}みあま^{アシ}



あもあと一夜灰汁あく小浸ひり一かに明の朝幾度あけありぐども水みずふ洗あらはし絞しおりあげてままのどく
きくまく 貴重専用の縮きぢゆうせんようをさくらへこまくとも、あく、くせん別べつふさく
場ばをわざけようがふ心こころを用ひよそまもす御機みやこをかまふ同ひと、我國わがくにハ
地中ちゆうの氷氣雪あいきせつのああふ發動はつとうざるや雪中ゆきゆうの雨あめ兩りょうも春はることまくらまくらをあ
件じのごとく自じふさくも晴はるのつつ事こと一かずあくまく灰汁あくふひづふひづとふさくもす毎日まいにち
ちくすちくすをうけて幾日いくを歴へて向むかをうけるのちまくらまくらをくるやうでましも
らんともく白しらぢぢをさくらへをりくく朝日あさひのあらあらと界さのて玉階平上ぎょくみ列�と
水晶白布すいじょうしらふふ紅映いろえい————景色けきのふたととがる光景こうけいハ雪ゆきふまきうる暖國ぬるくに
の風雅人ふうぎじんふつをくふつをくどあむくあむく凡まんちちを晒さらふ種たねの野の爲ためあくあくどもくどもく其その
大畧だいらんをあるひのの

○縮の市

をちやまなが
市湯とてちよの市あくまふらる浦の内十四町小千谷塙澤の四ヶ所之

初市を里言ひあるとひの雪どひの簾の明をのと四月のち、ト、やふ有
堀の内よりたゞも次ふ小千谷次ふ十日町次ふ塙澤ひづます三日づ間を置
てあり一定うへて右四十所の外ふ市場うへ十日町ふ三都呉服問屋の定
宿ありて縮をうふ買市日ぬ遠近の村くとり男女をいふ所持のちふ名
所を記す紙簽をつけく市場ふ持よりその品を買入ふ乞せて賣買の直
段定きば鑑符をうそりこの日市をう金ふ換ふもよそ半年あまり縮のう
み辛苦きく此初市の為うきて縮賣へさうこそふ那るかの人の縫をう
せ足を踏見肩を磨う万の品ふもくふ店をうまゝ物を賣う遠く來りう
もの宿をゆことむもあまぐ家毎ふ人づひ香臭師の看物糞賣の弁舌人
の足をともうて錐を立ぎ形もあらねず此初市の人々繁花の地の染饅
ふもをきく劣ぞ右ふりふ四度の市をうてのちも在くより毎日問屋(来りてちどりをう
すちと仲買のりの在くふりうてすくまで六月十五日迄を夏ちどりの
十七日より翌年の初市(うち)より(うち)の縮の精疎の位を一番二番との價の高下もよそく定

ゆきどもその年とよりてもとづくのすへあり市との日とあ相場年と
氣運ふつき自然さざま相場より三さんとちんのちんとちんふのがと二さんと一
ちんふ位と前ともりてどとちんと半間賃と論とざざるのあを誰とかとう
ちんと初市と何程と賣とりよど手とあざりうどりを譽とす或
その伎とよりて娶とりんとひめ娘とあまと利とを次とふて名とを争とふあの
やゑふ市とみちとを持とへ兵吉との戦場とむちとちの相場と大
すと穀相場とひちとじうして事と前後と年とを年とを穀と上と縮と下とる年
豊とうきび縮と上と穀と下とる豊凶との万物と係とる事と此とを以とて知とづとさまとべ
万民豐年とをいふいふめや

一
九

我鹽澤の方言ふやうもと雪頬ふかく非きもの十二月の前後より高山の雪深く積りて凍る上へ猶雪からく降り重り時の氣

運ふよりてひよごとくで寐くよまふ山の頂の大木ふりて雪風うどん
一塊り枝よりむちうづ山の聳ふ隨ひて轉び下りすうづ雪を丸て次
第ふ大をうづ幾万斤の重きをうづるの幾丈の大石を轉じ走ぐて
そきづら為ふあくべに雪がせききく雪の洪波をきて大木を根きふは
大石をもかく人家をもかく噴き出すあり此時ハクシテ暴風
雪を吹きちづれ凍雲空ふ布て白葦も立地ふ暗夜とある事 雪頬ふちうづ
きよまく前あむりてひととくをひととくのまくもあまたとくとくめまくと此
やつらへまくびまく落するやゑ不意をうきて逃んとモモギ軟うづ雪
深くて走りて四十人やて一人助く稀く幾十丈の雪人力を以て掘るあと
うづまく三四月ふりて雪消てのち死骸をすす事ありやからを處ふよう
て。をかく。いや。あく。あく。うすくとよゆ山家をつくらう。奇談とぞう聞
其災きた地理を作らふ村をどづぎて遊ん。あ

するがあまことあまとうをけまであまび

○雪中化水祝ひ

魚沼那の内宇賀地の郷端の内の鎮守宇賀地の神社ハ本社八幡宮へ上古より立せられと云縁起文多けまことか省く靈験あらゆるゆゑハ昔く世ある處ナリ神主官氏の家小貞和文明の頃の記録今ふ存セリ當主ハ文雅を好吟詠ゆも富リ雅名を正樹との余も同好を以て交を修ひ幣下と唱す社家も諸方ふあまとある大社ニ此神の氏子堀の内を娶をむく又婚をとくうるゆも神勅と云婚ふ水を賜ふことを花水祝ひとく毎年正月十五日の神使へ新婚あらうる家毎小神使をゆづるや久門いかき時ハ早朝より一て黄昏ぶりの時もあり友人嘿齊翁曰堀の内の人花水祝ひとくふやハ淡路宮瑞井の井中少多蓮花の落す祥ありての日本紀ふそぞるふ溢觴にて花水の号をくふ起立あやとりんまきまきだ新婚の婚ふ神水を汲すく當社の神祝とぞさて

當日新婚あらうる家ふ神使と云ひ人ハ百姓の内細家門地の輩神使を勢づき家定りありその中ゆく服忌ハまく寡うる者家内ふ病人ありの縁類ふ不祥ありの間除てゆくも家内ふ故障う平安無事うる者を擧び神使の前の朝神主沐浴有戒、齊服をつけく本社ふ昇りそぞびる人々の名をもて御圍ふあげ神慮ふ任て神使と云神使ふ當りくす人潔齊て役を勤む是を大夫と云神人也大丈夫と云行裝を當日正月神使本社を出るその行裝ハ先狹箱三本道具臺笠立傘弓二張雜刀神使侍鳥帽子素襪次ふ太刀持長柄持傘さへ供侍二人草履取跡鎗一本重りの品神庫ふ次ふ老子の人々大勢麻上下坐て隨ふかく行裝ゆく新婚の家ふいづやあまの以前雪中の道を作り雪ゆて山みのりのやうう所ハ雪を石壇のやうふつゝり或も雪ゆく枝をきめく凧を作りて見物のたゞりと云ふともあまの夫を費すと云ふとその家ゆべ家内をよしと清めとき其日正殿の間とぞあま

一間ハ塙垢離みきよもてを神使の席と一練筵を布くと上座ハ毛氈をあま上段の間ハ表り刀鉤をかく次の間もハ親族ハまくまくと入るより祝美のちう物をうべしと鳴臺うどふ賀咏をとすなどとのうちめぐと門也幕をうちすれどの處をあがりあげてて下小僧脱の壇を起す玄関式臺ハ准ニ家内のものりつまる衣服をあらわし神使をまつ神使にさとまけハ親わすりハ親子麻上下ゆく地上ふ出で神使をむろ神使のさうりとさなふをせきてて跋扈うり大声坐て正一位三社官使者と大呼神使を見て亭主地上ふ平伏一神使を引ての正殿ふ座さしも行列ハ家の左右ふあつて隊をうもとて神使一烟盒茶吸物膳部をひく一數献をもむあくあく婚ふ盃を与ふ三方肴をとせむ獻酌七獻をかまし盃ごとふ祝美の小譜をもくふ事終りて神使奉り他ハ新姻あり一一家あまハ又到る式前のごとく此神使ハの花水を賜ふ事を神より氏子(告り)の使神使社頭時里正の家立より御者神使社内へ駆り一そく踊りの行列を繰りて一番ハ傘矛錦とづり横説あり一が長けまば首くさそニぢんハ假面をあらて鉗女ハ扮する者一人簾のさと小紙小女門を多がむるをつけてかゞて次ふことを假面にて猿田彦ハ扮するもの一人麻衣ハ作りて綻帽やうの物を冠り手杖のさきを赤くうて男根ハ表示するをうべ三ぢんハ法服を美しくかゞり山伏螺をかく四ぢんハ小児の警固、五ぢんハ身をかゞて隨ふ次ハ大人の警固、麻上下杖を持て非常をいゆも五ぢんハ踊の者大勢花すらる浴衣ハ正月人勢ハ熱色ある細帯をう一群行里言ふことをごうさんあやうとひて降臨象うべ一皇孫日向の高千穂の峯ハ天降りゆひ一ふ縁の心うくんと嘿

花水祝浴水畧圖



堀の内驛花水祝ひ
噪劇の図原本の
草画を此小載て

別不至細の圖と

示さるゆゑ

桿刺の勞と

省す在り

梅よきもよむと
このわや景もも
水を玩り

堀の内を

銭木牧之畫

十九

一

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一百一

一百二

一百三

一百四

一百五

一百六

一百七

一百八

一百九

一百十

一百十一

一百十二

一百十三

一百十四

一百十五

一百十六

一百十七

一百十八

一百十九

一百二十

一百二十一

一百二十二

一百二十三

一百二十四

一百二十五

一百二十六

一百二十七

一百二十八

一百二十九

一百三十

一百三十一

一百三十二

一百三十三

一百三十四

一百三十五

一百三十六

一百三十七

一百三十八

一百三十九

一百四十

一百四十一

一百四十二

一百四十三

一百四十四

一百四十五

一百四十六

一百四十七

一百四十八

一百四十九

一百五十

一百五十一

一百五十二

一百五十三

一百五十四

一百五十五

一百五十六

一百五十七

一百五十八

一百五十九

一百六十

一百六十一

一百六十二

一百六十三

一百六十四

一百六十五

一百六十六

一百六十七

一百六十八

一百六十九

一百七十

一百七十一

一百七十二

一百七十三

一百七十四

一百七十五

一百七十六

一百七十七

一百七十八

一百七十九

一百八十

一百八十一

一百八十二

一百八十三

一百八十四

一百八十五

一百八十六

一百八十七

一百八十八

一百八十九

一百九十

一百九十一

一百九十二

一百九十三

一百九十四

一百九十五

一百九十六

翁より獨説あり。——
「骨の方」此をどう場をもひりのまへ
まうけあきあつて、蓬をしわあつて、手桶二升水をくらひ松葉と
昆布とを水引ひ、むちづけじろの上ふもき鉈子盃をとがく水取と
骨水をあぶる者二人副取とす。又二人がくたまきひまひましげふ
じぞうとへやう細帶みてをどりのまつをすうをどり家ふちうけ行列
ひじなみ踊人かのむろのめぐらむくらでうむつをどるをの唱哥み
めでくの若松まみ枝も葉も茂るまんややくの花水さんやせかく
あびせん我夫男せみふをりうれくあやうぐをうえてうひをどり事慣る頭の
けいごかの水くらひもの程を見く骨水三献を祝ひせうの手桶の水を入れて
左右より骨の頭へ滻のごとくあびせかくことを見く衆人抃躍てめでく
と賀ふむとふそまきせり入りをどり、獨家ふもか一入てをどりう
くふよせハ遍ゆてどろくと立きう再びもぐらのどとく列をうく他の

骨の家ふりて事なくもをどり、宿役の家まへてあるひくゆる入
りてをどりありくと田舎よりのを視るゆまきうまく此日ハ遠近の老若男女
あきをつくとて戯のことくあつまりかくとくもて熱藥もくう筆で下ふ
尽かす。○按る小骨水を汲ぐ事ハ男の阳火ふ女の阴の水をあくを
て子をあくむの咒事也妻の火を薦るとゆ祝事と此事室町殿の
頃武家の俗習よりきて農商もとくふ做ひくや行は事事物ふ見え
テ見原先生の歳時記江戸もと宝永の頃まで世一月正月十五日の
事と。——祝義のくふくきて大ふ流行りの骨水恨ある者事を水禊ひよ
よせくさぬくの狼籍をうも入もす。あく人の死亡もくひくすまく
うくーや多正徳の頃國禁ありて事絶。——
「骨の見立」中国初以来の事を記す本元件の花水禊ひハ神祕と有バ
別ふやゑよ。——もある。——あくと雪のつゆふその大畧を記して好古家

の談柄ふ具見るの

西書卷之二

支那遺稿

○ 萝山の奇事

越後の頃城郡松の山ハ一庄の総名也て許多の村落を併有する大庄といひ是も山間の村落也て一村の内とりども平地ナリテ松代との所のミ平地にて農家軒を連ね外百番の譜ふアキテ松山鏡といひ此地ニシテ跡とある鏡池の古跡もアリ今ハ池もあらねやうふ理ミテ此地ニシテ跡とあるより按る小松山がミテヒハ鏡破の繪巻とアリのを原として作里タク山の形三角タクウタノ名タク一山みちうた處ふ須川村名づく曾蒲村となりあり此山毎年二月に入り夜中かぎりて雪顛アリ其ひミ一二里ふ聞セ傳てシテ白髮白衣の老公幣をひちてタクミふ乗り下ろシトム此を須川村の方(二千町余の處真直下)七年ハ豊作ニ富浦村の方)

斜ふてて八年ハ凶作と其驗少も違ふ事タク一年の豊山雪顛ニ係る事此山のみ限るモ一奇事とアリ

固アリハ余が旧友出雲崎小住丸山氏の家祖父ハ博学の聞えアリテ入タリき余二十年前丸山氏の家ニ遊節をとどマリ一時祖父が宝曆の頃の著述ニシテ越後名寄との書をつとめシテ小三百巻自筆の寫本ニ名寄とんあまと越後の風土記アリ一国の神社佛閣名所旧跡山川地理人物國産薬品の類までと部を分圖を以テ通曉ノサモアキアリ精撰と此書ニ古蓼山の説も粗スアリ且どさみとて引ぞ蓼山の手をひふつまく此書の事をかりひりセトゾガラ精撰大成の書も空ヘヘ秘笈ナリテ世に失くすが惜けヌモアフリ

○ 秋山の古風

信濃と越後の国境ニ秋山と云ふ處あり大秋山村との木を根元として十五ヶ村をカバヤ秋山と云ふ秋山の中央ニ中津川と云ふありて是處奥沼妻の庄を川之東

古の風俗が残りと聞へ度一度尋ねども居りて此地を
ありする案内者を得たりゆき偶然あらまち案内教ふすせ朱味
噌醬油鰯節茶蠟燭まで。用意して従者ふりて立ひ文政
十一年九月八日の事うちてその日秋山ふ近き見玉村の不動院ふ宿次の日
桃源を尋ねる心地にて秋山ふうび入りぬまへり。清水川原とのあつて
ひづんとも道の傍ふ丸木の柱を建往連を引ひて中央ふ高れあつて
うる事ぞと立よりて小童のうきてすさうのりは文字モ「
くみのへとより」とトあるせり案内曰秋山の人ハ砲瘡をもとす事
死をかうき如くいふとくまうとくまうのあまく我子とひども
家ふ居せむ山ふ假小屋を作りて入をもき贋物をとびやするのをもと
錢あるべく山伏をひのみを祈らももあらずとくまう何事の用をも捨て
る此のまふ秋山の人他所ゆきもなうもあらずとくまう何事の用をも捨て

西ふ十五村あり東の方ふ在る村ハ・
△下ノ越後ふぞくモ・
清水川原村入家二軒あり
西ふ十五村あり東の方ふ在る村ハ・
△下ノ信濃ふぞくモ・
清水川原村入家二軒あり
三倉村人家・中の平村軒・
和山軒・五西ふあり村・下結東村・
屋敷村軒十九・湯本あり此地東
倉の高嶺雲を凌て衆山とてふ双ぶ清水川原
嶮路ありの二夫是を守り万卒も越え難き山間幽遊
大む一平家の人の隠する所となり牧之謂り鎮守府將軍平の
胤奥山太郎の孫城の鬼九郎資國が嫡男城の太郎資長の代まで
鳥坂山ふ城を構一国ふ威を震ひ
謀叛の聞えありて鎌倉の討手佐木
三郎兵衛入道西念とあら戰ひて終ふ落城せり此時貴族の落人うど
秋山ふ隠すトウラん里俗の傳ふ平氏とのるよあるふ似アリ此秋山

風譜卷之四

卷之三

とをひき取るゝ危けきが色蕉の蝶も居直る笠の上といひ木曾の機車をも
く劣らず此稿を渡るやとひふ案内ひりて今見此岸ふつまく東の村を
足玉ひく小赤倉村ふひく玉ノ程よき道うべ小赤倉ふ知る人もあり宿
をりともどりとひふ稿をこころぞとひて心もつき岩ふくらひて墨斗とりひど
稿を寫へきどにて四辺をえくとせば行雁峯を越て雪ふ字をうづき猿指をつ
ひく冰ふ画を寫モ奇樹崖ふ横うりて竜の眠る如く怪岩途を塞ぎて帝
の卧たふ似たり山林ハ遠く深く錦を布き碧水ハ深く激して藍を流せり金
壁双び綠山連りてすきみ画ゆもかよびざる光景へ目をさせバあそ」やまひづ
農夫二人きりうちのく衆を脊負くの稿をこころんとを岸ふくらむことを
まごうの様を石壇のぐくあまごう稿をやく事平地のぐくちの半ぶつま
稿擣くとて危きりんと身の毛いぢろをうこひりをも
の藤綱ふきぐりと岸ふのがりくまゐ猿のごとくをくび人のこゑをうそ

逃^{スル}て此^をまよひ此地^{ゆゑ}へ施^{カシム}者甚^だ稀^ニ十年ふ一人あるらずと語り
きて清水川原の村ふいづる^ノ家二軒あり^{久留}家^の居^所の作り見る他所ふくらむりあはしや
ふすもひく立牛^{フシタヌキ}ふとま下りき^テ猿飛^{さる}飛^{ハシム}稿^{ハシ}を見玉^{アマエ}とて案内^{サミ}前^{アマエ}立^{タマツ}此
秋山の道^{ハシ}を^{アマエ}所^{ハシ}の人の^{トドケ}べき^{ハシ}あはの^{ミハシ}きする道^{ハシ}牛馬^{ウマ}な^{ハシ}ふは
ひが^{ハシ}所^{ハシ}を^{アマエ}道^{ハシ}狭^{ハシ}小^{ハシ}辻^{ハシ}深^{ハシ}道^{ハシ}を^{アマエ}所^{ハシ}を^{アマエ}
うりか^{ハシ}て^{アマエ}中津川^{ハシ}の岸^{ハシ}ふいづ^ノ所^{ハシ}稿^{ハシ}あり^{アマエ}猿^{さる}
飛^{ハシム}稿^{ハシ}と^{アマエ}稿^{ハシ}の^{アマエ}を^{アマエ}ふ^{アマエ}や猿^{さる}も^{アマエ}翼^{ヒタチ}わ^{アマエ}飛^{ハシム}べ^{アマエ}あわ^{アマエ}び^{アマエ}西岸^{ハシ}
絶壁^{ハシ}ゆく屏風^{ハシ}を^{アマエ}うる^{アマエ}如^{アマエ}き^{アマエ}ども岸^{ハシ}より^{アマエ}一丈^{アマエ}あまり^{アマエ}下^{アマエ}ふ西岸^{ハシ}より^{アマエ}
むらへ^{アマエ}る岩^{ハシ}の鼻^{ハシ}あり^{アマエ}こ^{アマエ}と^{アマエ}うり^{アマエ}と^{アマエ}稿^{ハシ}を^{アマエ}架^{ハシム}稿^{ハシ}わ^{アマエ}所^{ハシ}下^{アマエ}りん^{アマエ}為^{アマエ}
機^{ハシ}を^{アマエ}きうけて^{アマエ}稿^{ハシ}直^{アマエ}丸木^{ハシ}を^{アマエ}一本^{アマエ}細木^{ハシ}を^{アマエ}藤蔓^{ハシ}も^{アマエ}うけ^{アマエ}うり^{アマエ}
渡^{アマエ}り^{アマエ}二十間^{アマエ}あまり^{アマエ}稿^{ハシ}の廣^{アマエ}三尺^{アマエ}ゆく^{アマエ}擗^{ハシ}杆^{ハシ}ハ^{アマエ}と^{アマエ}作り^{アマエ}稿^{ハシ}を^{アマエ}渡^{アマエ}り^{アマエ}
對^{アマエ}ひの岸^{ハシ}小藤綱^{ハシ}を^{アマエ}岸^{ハシ}の大木^{ハシ}から^{アマエ}下^{アマエ}げ^{アマエ}あり^{アマエ}足^{アマエ}み縫^{アマエ}り^{アマエ}岸^{ハシ}の^{アマエ}が^{アマエ}うり^{アマエ}

雪譜卷之十

卷之三

を新ふせりまことをきうと例の細道をさざり高木のぎり低ふ下りよやどる途
をへてやうやく三倉村ふりきりてゐ人家三軒あり今朝見玉村より用意一
弁當をひらうわとあらひ入りふ差女ようちううととりひつ木の盤の上ふ長
き草をあきて木拂のやううめのあく揆て解分るきみこりううりのむて何ふもんぞ
と岡バ山ふあらうりとりふ草ふきを余ふしてあを衣を作るとりあを衣とりふ
名のめぐれけよば強くうがゆけよば老女ハコトひくとスだ案内がふすよあ
衣とへ婆くどめ着するあきことよをつよば帶布のやううを袖キ羽織の
やうふあう物ニ茶を乞ひけよば差女栗たまてまづ宛瘡の事を聞ふ案内がく我
塙澤より秋山をえふまうりものとあやさんへ去年此こをうとうかうとふ
差女りくらうり内のりのハ今年ハ井戸蛙のやうふきうぐんぐ里ハ一度も出うえ
どくらひつゝまゆる茶をとよど煤を焚火かるやうきよび別ふ白湯をゆく
て喰くいをうりつゝ此住居をえふ基礎きそもとをを掘立くわらき柱ふ貫ぬきを藤蔓つば
うきべ一家内をとよど稿筵こうしんのちぎりふをあきうべ
納戸も戸棚とだなもう一まい薪多き戸棚ときわもとつづりふ棚たなあり
木鉢の大うきわ三ツ四ツあり所て作るやう之葉罐土瓶雷盆はくはんなどりづきの家ゆ
キ秋山の人家じんをとふかうト今月秋山ふ入りうふりうて家を五つ入
げ粟稗あわひえを刈さむとろうきを家ふ居ゐ男をとぞさそとひうち朽くの實みをひ
うひく山よりかうりとひ娘むすめをつぶふ髪かみハ油氣ゆきもうくまろあつらねるを狩
て結むすひあうびう手拭てぬぎひふく頭卷かぶとまきをう木綿袴もものせせ木綿袴もものせせ古画こがあるとひの吊

えつる古風ふるふうのミド 秋山の女めのをかくの如ごとき 差女さめのふ土地ちぢの風俗ふうぞくをどもりげり が心
きものやなみの古風ふるふう うようよ ざまとばさくふにしへ物ものをとくせく やびて立たきりけり ○ かくて中の平村ひらむら 九軒
天酒村あめざむら 二大赤澤村おほあかざわむら 軒べを歷へる道みちを峻きき山行さんぎ て此日申きみの下刻さく やうへ 小赤澤こあかざわ
いそぬくゆ人家じやうハ軒べありて秋山の中ニヶ所まちの大村おおむら 上結東じゆとうハ 大九軒おほくわん 有ある此村ふ市左門いちざぶらん とて
村中第一の大家あり 幸さいひ案内あんない者の知し人ひと ざまと宿しゆくをわくとあたちへりてスす ふ四間よんけん
ふ六間ろくけん やどり住居じゆき 主人夫婦しゆじんふふ 差人せうじん 長男ながのハ七八次しじ ふ娘むすめ三人さんじん あり 奥おくの方ほう ふ四
疊よをうちの一间ま ありて あそびあそび 稿送こうそうをとと あり 古画こが ゆもあまあま とと えぐえぐ 古風ふるふう
勝手こうしやの方ほう 由ゆ 日用じゆうの器うつわ あまあま とりちとりち うづ うづ ふくふく 木鉢きばつ 三さんツ 四よツ あり 炉ろ
裏うら はきへの大きく 深ふかきのみこまを用意よういつ する米味噌まいみそ をとくひごとく 今朝いま 清水河原村きよみずがはらむら
てりともあつる舞草まいぐさ ふくの芋いも などとくそく 案内あんない 料理りょうり をとく 雷盆らいぼん をとりバ末すゑ
の娘むすめ が棚たな のまよりとくひごとくをとく が常つね めつらをとく あるもくけふるうり
のちふきけび 此秋山ふもとむちのあくべ此家このいえ と此本家ほんいえ のまど此地このち ゆて近年豆うね

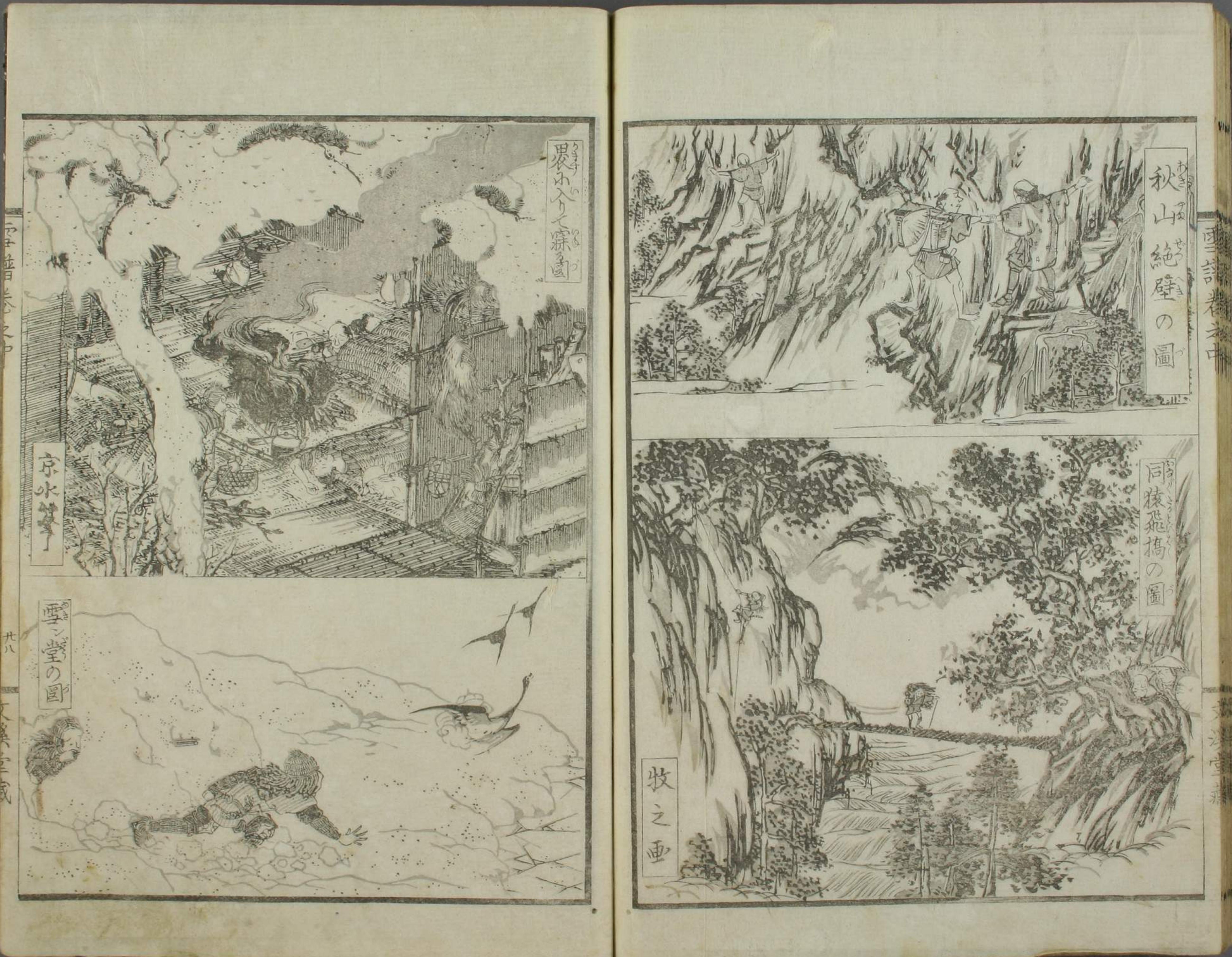
作りあらわく味噌をまつまごも麴を入れるをせばやどを汁みちあえもりうち
りもどるとぞさて此家ゆも別ふ竈へうへてまかせゑのを煮入とやがて夜もとまんと
バ姫小松を細く割しろを燈とも光り一室をてうへて蠟燭ももまきと案内調ト
トのそろひぬ碗ふゆり山折敷ふを多くいどせりあらどうひてうへて芋と蕪菜
を味噌汁ふをすりふりきりのあり案内げさー心えそりやうと秋山の名
物の豆腐をとひ豆を挽すりせしめ糟を漬ますや多味なり喰をうて後あらび
茶の間の且那秋山のこどびふ人を教へて茶の間の且那とどりうすふ入らぞとのふ此こそを
きくぐくて案内ふ間居風呂ふ入り玉とひよすとをゑあをどりう又ハ居り
湯ともりふ秋山ふをゑあを桶をむちりへ此家と此本家とをうへと此地の人とまくハ冬も
とづりあらふ入りふれふれすすき道のつらきもとをとてうきくえの門の
横座よきざ小坂り田舎のなまづふと上座ともハふらふ銅鑊やかんもありそ用意の茶を從者
が焚火ふを喫貯くわくす菓子くだものをうの三入の娘ゆもとせんとせんと三人炒不腰うそりけく箕居きをう

足を灰のうへと入生珍りてうきを喰ふ所ゆもうす。太を惜氣もあく
焼うる火影小照を不生ば末のむとあひ色黒く肥太りて醜一をうづ福を生
うあげて虫をひくはねずけと耻らひあるもせば二人の姉ハ色白くして玉戻
双(ひし)る美人ニ菓子を喰うる顔をあひて打名もる面まつ。愛形ハ云々やう
かる一双の玉を秋山の田夫(たんぶ)妻(よ)せんハ可憐琴(かれんこと)を薪(いの)て鼈(かめ)を煮(い)る如(ごと)く主人ハ
里地の事をもよく知りて話も分る翁(おきな)多所の風俗をうづ御(ご)へて筆をあす
僅(ひそ)の貢(うなぎ)をうそと申(うそ)ふりて信濃と越後との他の村名主の支配をうけ且那寺
をも定めど冬ハ雪ニ丈餘(よ)もつりて人のやまとあらゆゑ此時人死を生バ寺不
足(あ)るやうさまに此村小山田を氏(うじ)と助三郎(すけさんろう)と特傳(とくでん)
と黒駄太子(くろだおとし)と称(あらわ)す画軸(がくじゆ)ありてを買(う)りて死人の上を二三(さん)づきこを引導(いんどう)
とて私(み)小莽(さむ)寺(てら)をまざらまざりせんハむづりよりとてをうりと福原(ふくはら)の

氏(うじ)の右の助三郎(すけさんろう)山田の徳本家(とくほんけ)太子(おとし)の画像(がぞう)と太子(おとし)のやまとあらゆゑ馬(ま)のり
月(つき)の中(なか)小(ちい)さきぬ地(ぢ)のよ(り)りり牧(まき)助三郎(すけさんろう)家(いえ)の(り)の一軸(いつじゆ)をうそと申(うそ)が正月(せいがつ)
と申(うそ)と申(うそ)。○此地の人上食(あがめ)ハ栗(くり)小豆(まめ)をも交(まじ)て喰(く)ふ下食(あがめ)ハ栗(くり)糠(ぬか)小(ちい)さ
乾(から)菜(なめり)と申(うそ)て喰(く)ふ又(また)朽(く)の實(み)を食(く)む。○婚姻(こんいん)ハ秋山十五(じゅうご)ヶ村(がそん)をうぎりにて
他取(ほかとり)ふりと申(うそ)て婦(め)人(じん)他所(ほかしょ)男(おとこ)をみて親族(しんぞく)不通(ふつう)て再び面會(めんゐ)せざるをむ
よりの留(とど)め○秋山中(なか)小(ちい)寺院(いんてら)ハまつゝ庵室(あんしつ)もつゝ八幡(はちまん)の小社(こしゃ)一(いつ)あり寺(てら)
き(あらわ)し無(む)筆(ひ)と申(うそ)て尊教(そんきょう)をば物識(ものしき)と申(うそ)て尊敬(そんけい)を心(こころ)あるの里(さと)より手(て)本(もと)を得(う)りうはりドをかげえる人
地(じ)うき(うき)と申(うそ)て草(くさ)ありて木(き)皮(は)を製(せい)て麻(ま)ふ贋(あらわ)用(もち)を為(ため)。○翁(おきな)がくりうり一時(いち)
いのちの形(かたち)状(じょう)をくらべて草(くさ)の名(な)ニ麻(ま)の字(字)不(あ)熟(じゆ)一(いつ)も生(う)き(う)れ。○深山(ふかやま)幽僻(ゆうへき)の
本(もと)草(くさ)ふ(ふ)生(う)き(う)れ。○草(くさ)の名(な)ニ麻(ま)の字(字)不(あ)熟(じゆ)一(いつ)も生(う)き(う)れ。○麻(ま)ふ贋(あらわ)用(もち)を為(ため)。○翁(おきな)がくりうり一時(いち)

べきりのそよらをひらくとふあや草の形狀を聞ざりてあみさざぐでー○秋山の人もべて冬も着るまゝ先に嘗て夜具といひのを冬ハ終夜火中ふ大火をしきとの傍小眠る甚寒ふり至る他所より稿をかたて作りきつて思入へりて眠る妻のめんをひらく作りて夫婦共にまづふ寝る○秋山は夜具を持て家は此翁の家とやうれ一軒あるのみをもののじらんで織つてふりのくをに入布子の毛と大うれ宿り客のあふまるのとぞせの所らちりく身ふとも○稿ふとやきや多鞋をなはれ男女徒跣みて山ふとももくく○人病あむが米の粥を食せし葉と重きハ山伏をむくりのとぞ病をいのう氏みもんえ○鏡を持つ女秋山中ふ五人ありとど松山の政事○此地の人まくじらをもとす○篤實温厚ふくと人と争ふことなく色慾ふ薄く博奕をあらむ酒屋あけみだ酒のむ人ナリむくよりひともちふともぬをもあら人ナリとくり實ふ肉食の仙境○かくて次の日やうの稿とりをこころて湯本ふ宿り温泉ふ浴ー次の日

西の村々をえ上結東村ふ宿り猿飛橋をこりてその日見玉村ふぞうて家ふかくきりまゐる記をべきりあまと文多けまでのせむ秋山記行二巻を編して家ふ藏む○折の本字ハ實の食方翁ふ聞くをこふ記して凶年の心得とを折の實ハ八月熟して落るをいふひ莢てのち乾く手ふ接てあくき筛ふきて滑皮をきり簞ふ布をあまた粉ふきるをあきよくおこし水をうちてあらせあまた布ふつみ水ふかくしゆ四五日ふれてとりひいて絞りて水をきりて乾くあづその白き事雪のごとく是を粟稗ふくふませ又ハ折をりも食とせ又餅ふもむるこ別種たりしを實も喰ふものあらハ折ふ似くとぞ○此秋山ふるいふ山村他國ふもあるよーを聞ふまべ珍りくねどあくく不すゆゑてふ記せり○秋山の產物木鉢まげ物ゑふ山をあきよげ鐵板ゑふ秋山ふ良材多くともども村中をあぐて中津川屈曲深き所浅き所ありて伐をこごとく又ハ牛馬をつかひまば良材を出しがく財をうる事難けまば天然の貪地



○狐火

酉陽雜俎ふ梶觸體を戴き片手を辯し尾を撃て火を出をとりたりかの國ハともあと我がまきくそへあくゞだそへ下ぶりべー狐ハ寒をいそぐ物也々我里ゑて冬ハ多モ稀ニ春ふいア雪のありサシムテうつりうる雪中食ふうゑ夜中人家ふちろき物を竊ミ喰ふす甚惡むべー人ことを知るやあうと小盜トとく人智を以てさまへかけどもをうの間小奪ひ喰ふ其妖術奇く怪くらひて時とうてうきうれとぞうの鼠のこと一狐の妖魅をあまゆ和漢めづくにいづくもよくみどりふ我雪中ゆへあうりをどうんとあ二階の窓のゆとあく書案ふ倚る或時故人鵬齊先生より菓子一折を贈きりとの夜寝んともる時狐の玉成かりひうの菓子折を狩縄も強と縛一天井へ高く釣りあきかくてはくまぶ術も施しきくらんと自傲りふかえ朝ふなまぐくへる縄ハ依然としてわくとめごとく菓子折消失するがごとく獨憎いびきふきうきう人の置くるやう小書案の上ふ

ありひきまほがひひう紙もとめきてくらへまくひ尽せりその妖をなす
一す不思議ニ或時ハ猫の声をうて猫を呼ひて喰へ且喰ふ差狐ハ婦女
を妖へて満ちるもあり喰せし女ハうくび髪をうそア其處ふ附へて熟睡せ
がでとーその由をうかねども一人も仔細をうそアー女キア留前後をあくまと
りあくびみハあくまだけまども事を耻ていふざるうんきて狐善く氷を聽と言
事酉陽雜俎ふるも本朝も今獨諒訪の湖水ハ狐涉一を視て人涉り
すむ和漢相同ド狐の火を為そ説ハまぬぐあまども信ぐア我が目前不視
一ハある夜深更の頃例の二階の窓の隙ふ火のうそを怪一とその隙間より覗
きまば孤雪の燐揚の上ふ在りてロトロ火をいざそよくこまび呼息の燃るごと
態ロトロ火をうそふりる寒火のごとーかりろけまだあくとく
のぞきゆア一火をいざそよくこまび時ありまば肚中の氣ふ應ぢうりん
まが氣息常ふ火をうそづく勿論ニ石亭が雲根志小狐の玉のひづるを云

火の玉のひかるふもあらず
火の玉とよ物の光ると常ふらず
火とよ

○ 狐を捕る

友人曰我が親しき者隣村へ夜詰小姓より飯を途の傍小茶鑪ありへり頃
しも夏の夕ニトモ農業の人の置忘れてるをも腹悪きもの拾
ひ陰えん持飯りて主を尋ねと鑪を手ふまげて二町ばかりあやまつたま
重くうり鑪の内ふ声ありて我をりづく連行せどりづふ膽を消一鑪をも
逃さりふれ前ふちり草の中へり入りとひづく一時の戯き
アクシ妖魅の術もありうべく人ふ欺きて捕らひ如何余咎てりの鎌炮を以
てもう論き番餌を以てちうへり人の欺くを知りども慾を捨て慎むるあ
ひぞをまへり知りうべくことを喰ひ反て人をあざむんとて捕らひきん
よち邪智あらきあふこ豈狐のまかんや人も又是ふ似たり邪智あるもの悪叟

とへあらうがくかく為バ人ハあらずと己^{おの}シ^の邪智を^ようのみ経由身を亡^ゆまふいづる當
懲^{さむ}も貳懲^{さむ}も懲^{さむ}ハいづる身を亡^ゆまの齋餌^{うゑき}至善人ハ路^{みち}小千金を視室^{みゆ}小美人と
對^{おほ}を^{おほ}ども心妄^{うつ}小動^{うご}止^{とど}ことを知りて定^{さだ}めあるやゑ^えかう人ハ胸^{むね}小明^{めい}
鏡^{かが}ありて善惡^{ぜんあく}を照^る一観^{くわん}てよきあ^いまを知りて其獨^{ひとり}を慎^{つつ}む之を明德^{めいとく}の鏡^{かが}
此鏡^{かが}ハ天道^{あまぢゆ}より誰^なもしく与^{あた}へあらざるども磨^{みが}ざさびて^てまざと^と若^わく
時^{とき}ある^る經濟^{けいじ}者^{しゃ}の教^きふ聞^きと^と狛^この詰^つふつけ大學^{だいがく}の蹄^つふりて風諫^{かうせん}せ^しへ問^とひ
人弱年^{よし}もあらも臭^{にお}のもの^のを^をきく^くり^り者^{もの}あらざり^{ざり}り^り無用^{むよう}の長舌^{ながぜ}
生^うど^うち^ちひ^ひが^がふ^ませ^くあ^ませ^りき^く我^わが里^{さと}みて^み狛^こを^を捕^とる^と術^{じゆ}あ^ある^る
う^うふ^ふ手^てを^を懷^いふ^くて^て捕^とる^と術^{じゆ}あり^とその^そ術^{じゆ}う^うと^と春陽^{しゅんよう}の頃^{ごろ}つ^づり^り雪^{ゆき}
登^の内^{うち}ハ軟^{なん}す^すや^や夜^よ^よ狛^この^の徘徊^{はい}ち^ち所^所(麥^{むぎ}う^うど^ど春^{はる}杵^こを^を雪^{ゆき}中^{なか}へ^へき^き入^るて^て二^ツ
も三^みつ^つも^もき^きの^の穴^{あな}を作^つり^りお^おけ^けば^ば夜^よふ^ふ入^るて^て此^こ穴^{あな}も^も凍^こり^りて^て岩^{いわ}の^の穴^{あな}の^のう^うふ^ふり^りう^う
え^えう^うす^す好^すく^く油^{あぶら}う^うど^どを^をち^ちく^く、^あき^きの^の穴^{あな}も^も入^るか^かき^き夜^よけ^け人^{ひと}靜^{しづ}り^り

う狐アシカをふきてうちアシカーおきてるを喰ひ尽アシカー獵アシカたゞぎまアシカだらうぞの穴アシカがあるを
くさんとアシカー身アシカをあら倒アシカふたりて穴アシカ入りアシカてきアシカるのをくらひつアシカー出アシカんともアシカ
ふ尾アシカの毛アシカうりづアシカ程アシカふ作りアシカうけアシカる穴アシカまだ再びアシカりづアシカるや叶アシカのぞ雪アシカハ深夜アシカ
をくらへてアシカまもアシカーうりづアシカがちうらアシカみアシカ穴アシカをやがるすもくらうだアシカいとアシカーとアシカ
終アシカ性アシカを勞アシカらアシカを捕アシカてんとそりアシカーものこゑアシカをそく水アシカをくまきアシカてあらふ入アシカ
あやりアシカる雪アシカの穴アシカまだかやハ水アシカも漏アシカだ狐アシカハ尾アシカを振りアシカて水アシカふくすむ入アシカハ辺アシカりふ
ありそとアシカ將アシカふ死せんとアシカそとアシカ時アシカうきアシカぞ屁アシカをひアシカを避アシカる狐アシカ尾アシカを搖アシカすをそ溺死アシカ
を知アシカり尾アシカを採アシカり大根アシカを抜アシカぐとアシカー狐アシカを得アシカる穴アシカ二アシカツも三アシカツも作りアシカくやゑアシカす
よれ時アシカハ二足アシカも三足アシカも狐アシカを引拔アシカすありえアシカハ凍アシカりて岩アシカのすううる雪アシカの穴アシカまだなり
土アシカの穴アシカハうきアシカ不得アシカのうきアシカハ自在アシカをうて逃アシカまるアシカーさきアシカだ雪國アシカふくさるすうきアシカだ
雪アシカのつアシカてふあアシカせり

○鷹アシカの代見立

我国アシカ雪アシカ盛アシカうきアシカ時アシカハ鳥アシカうどアシカの食アシカを乞アシカすの一点アシカもうきアシカや冬アシカハ山野アシカの鳥アシカを捕アシカ
春アシカふいアシカアリ雪アシカ降アシカりアシカ頃アシカ諸アシカ鳥アシカをうきアシカ二月アシカふいアシカうきアシカても野山アシカ一面アシカの雪アシカの中アシカ
清水アシカうきアシカ水氣温アシカうきアシカや氣雪アシカのまアシカ消アシカる処アシカもありうきアシカ水鳥アシカの下アシカる処アシカ
雁アシカこゑアシカをうきアシカばまアシカ二三拘アシカうふをうて己アシカまアシカ水食アシカまアシカ糞アシカをのうして喰アシカある処アシカ
目アシカとアシカ俚言アシカふこゑアシカを雁アシカの代見立アシカとアシカ雁アシカのかくアシカちアシカ友鳥アシカを集アシカひまアシカりて
かきアシカゆも求食アシカせんとアシカて朋友アシカ小信アシカあアシカす人アシカも耻アシカべきアシカゆアシカ心アシカうきアシカ徒アシカの糞アシカ
をうアシカびアシカあアシカた代見立アシカとアシカ雁アシカあまアシカうきアシカび種アシカの術アシカを尽アシカして雁アシカのくアシカをまアシカう
捕アシカよ雁アシカもうアシカびアシカとアシカまアシカてこゑアシカをうアシカゆ人アシカふあアシカせアシカとアシカ糞アシカふ土アシカをうアシカけアシカて糞アシカふ土アシカをうアシカけアシカてくアシカ
かくアシカ代見立アシカあアシカきアシカで食アシカうアシカー処アシカハやんふ土アシカをうアシカけアシカてびアシカ事アシカびアシカの
智アシカあアシカす人アシカふあアシカ人アシカまアシカこゑアシカをも知アシカてやアシカさアシカび糞アシカふ土アシカをうアシカけアシカてきアシカ
其アシカ辺アシカの矢アシカ頃アシカよき処アシカ人の入アシカべき程アシカ不撓アシカをうせアシカるやううきアシカのを雪アシカふて作り後アシカ
ふ入り口アシカをつけ内アシカハ洞アシカふうアシカ雁アシカのをうアシカき方アシカふ穴アシカをつアシカてとのまアシカすをうアシカ雁アシカハ

ありあらかじめべき時雁を又モバウの完より鍛炮の銃口をひてそろへかくもるを里言
小也まえどさうとひの雪ン堂へととやもをアモ雁の居了處を替フテ夕暮夜半曉へ
人此時をもちて種々のエを尽して押ふ我國雪の為ふまぐの難美ハあらず
前ふりくるでくうきども雪の重宝うるすもあり第一ハ大小雪舟の便利舗の製
作の雪ン堂○田金芝居の舞臺模敷花道より雪を作る○辻賣の居了處賣
物の臺架もより雪を作る是を里言ふさうやとひ○獣狩追鳥○積雪家を
埋め却て寒威を擯ぐ○夏も山間の雪を以て奥鳥の肉を擁包かけ敗餒モ
○雪水江河の源を養ふキ○此外詳ふいづ獨あるべ是をひりバ天地の万物捨
てきりハあづらば下捨て人惡のみ

○天の網

かよそ人惡をみて天罰ふ漏ぎすア奥の網ふりきざなダビトクタリヤエニシモた
えく天の網とりみり新潟より三里上りて赤塚村とひわたり山のところぐふ

凹をうくすありテホオモをとて細糸の網をもりて鳥をうこきを里言ふ赤塚
の天の網とひせ村小湾あるやゑ水鳥湾を慕ひてきずる山の凹を堀きてゐ
らぞ天の網不くろ大低ハ鶴とひ鴨ふ似る鳥之美味うるやゑ赤塚の冬至鳥
とぞ遠く称美を鶴鱗とりびきを齒けうるんあぢうもとハ古哥モもあまく
トあり

○雁の總立

かよそ陸鳥ハ夜中盲とひ水鳥ハ夜中眼明くとひ雁ハ夜中物をうするナラ
をひ明ニ他国ハあくぞ我國の雁ハむかくハ晝ハ眠り夜ハ飛行く眠る時ハ人ふ遠き
処ふく集り眠る時ハ首をあげて四方をうそくゆ雁二羽あり人こゑを番鳥
ともふ求食ふもあらん鶴小列をうそく雁行とて兵書ふりり人のあら処へま
ど居すふも位列をうそて漫うそぞ求食時ハ衆あまう遊ぶ時ハまみあそぶ雁中
ふ一雁ありて所為衆こゑふ隨ふ大將と士卒とのごとく人のまつるう又ハあやまを
スミバウのたん鳥羽うきをうそ餘のとうこゑをきりふ求食とも強づとも此羽

すまをまうあまをもぞ幾羽も亂て飛あぐりまえ列をすそ去る里言ふこまを雁の
總立とひよ雁の備ある事軍陣の如一餘の鳥ふきみす他国の雁もあらん
田舎人ゆく珍一うれし都會の人の詰柄みり

○浩海川ぎ涉り

あら川源ハ信越の境よりりぞ越後の内三十四里を流是千曲川小伴ひ此海入
る此川越後の。頸城。奥沼。三嶋。古志の四郡を流すやゑ四府見の文字
きんうとちかへふ僻すて古書ハ浩海又新浮海とも云えど此川属り曲
廣狹言ひ尽せば冬ハ一面小冰り闊てその上小雪つかりゝ所平地のどと
きで急流岩が激して水勢絶急にこうへ雪もつするやあらば浪をなす处もあり
渡口をとく斧を冰を碎きそよせども終日小冰厚くきりて力がよびぐて船ハ陸
ふ在りて人小冰の上を歩るこまを里言ふざへこすとひ我国の俚言ふまく
物の凍るを。ざん。あら。ひてさどひ。ひき。此川の冰り正月のちゑ二月の初

りふりまくば陽氣を得て自然と裂て流る大うハ七八間種々の形をまう大小ひ
とくとくぞ川の廣き所と狭き處とふあらず且ふ裂ちてタゞふきもとるか
きと一日あくひハ昼夜をぎりとて三十四里の冰をまくびけまきて北海小い
づとのひき千雷のとく山も震ふぞりと此日川小ち見る村々ハ慎み居て外ふ
りづるみゆきへ他所の者ハ浩海川の冰見とて花見のやう小酒肴をてぞま岸
ふ移達も艱りとてこまをなす大小幾万の氷斤水晶の盤石のことまづ藍
のやうきは浪ふ漂ひまくへ目ざめき並觀うり冰を観て樂ともる事暖國ゆ
きとふあくべば此川ふきうべとひ奇談あり次の巻ふりづ

